

令和 5 年度厚生労働科学研究費（労働安全衛生総合研究事業）
分担研究報告書

在宅テレワーカーの在宅勤務環境と身体症状の関連：第 2 報

研究分担者 金森 悟 帝京大学大学院公衆衛生学研究科／東京医科大学公衆衛生学分野
研究分担者 田淵 貴大 地方独立行政法人 大阪府立病院機構大阪国際がんセンター
研究代表者 甲斐 裕子 公益財団法人明治安田厚生事業団 体力医学研究所

研究要旨

令和 4 年度の「在宅テレワーカーの在宅勤務環境と身体症状の関連」に関する報告書の内容をもとに、栃木県宇都宮市で開催された第 96 回日本産業衛生学会にて成果を発表した。さらに、Journal of Occupational Health に論文を投稿し受理された。一連の研究より、在宅テレワーカーにおいては、在宅勤務環境の整備が不十分なほど（特に集中できる場、足元のスペース、温湿度、静けさ、通信環境、気分転換の場）、身体症状を持つ者が多いことが示唆された。今後は、在宅勤務環境をどうやって整備していくかについての検討が必要である。

A. 研究目的

令和 4 年度の本報告書にて、「在宅テレワーカーの在宅勤務環境と身体症状の関連」というタイトルで報告を行った。その内容をもとに、令和 5 年 5 月に栃木県宇都宮市で開催された第 96 回日本産業衛生学会にて、「在宅勤務者におけるテレワーク環境と身体症状の関連：JACSIS2021」というタイトルで口演発表を行った。また、同学会が発行している英文の学術雑誌である Journal of Occupational Health にも投稿を行い、「Association between the telecommuting environment and somatic symptoms among teleworkers in Japan」というタイトルで採択された。本報告書ではその概要を報告する。

論文に関する研究の目的は、在宅テレワーカーを対象に、在宅勤務環境と身体症状の関連を明らかにすることとした。さらに、テレワークの実施頻度別に層化した解析も行った。

B. 研究方法

令和 4 年度の報告書を参照のこと。

C. 研究結果・考察

身体症状得点のいずれのカットオフ、テレワークのいずれの実施頻度においても、在宅勤務環境の未充足が増えるほど身体症状ありの Prevalence Ratio (PR) が有意に高いという一貫した結果が認められた。在宅勤務環境の各項目においては、「集中して仕事ができる場所や部屋がある」「足元は、足を伸ばせる広いスペースがある」「室内の温度や湿度は快適である」「静かな環境である」「インターネット回線などの通信環境が安定している」「気分転換やリフレッシュできる場所や環境がある」の 6 項目において、充足に比べ未充足の方が身体症状ありの PR は有意に高いという一貫した結果であった。

D. 結論

在宅テレワーカーにおいては、在宅勤務環境の整備が不十分なほど（特に集中できる場、足元の

スペース、温湿度、静けさ、通信環境、気分転換の場)、身体症状を持つ者が多いことが示唆された。今後は、在宅勤務環境をどうやって整備していくかについての検討が必要である。

E. 研究発表

1. 論文発表

Kanamori S, Tabuchi T, Kai Y. Association between the telecommuting environment and somatic symptoms among teleworkers in Japan. Journal of Occupational Health 2024; 66(1): uiad014.

2. 学会発表

金森悟, 田淵貴大, 甲斐裕子. 在宅勤務者におけるテレワーク環境と身体症状の関連 : JACSIS2021. 第96回日本産業衛生学会. 宇都宮. 2023年5月.

F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

文献

なし